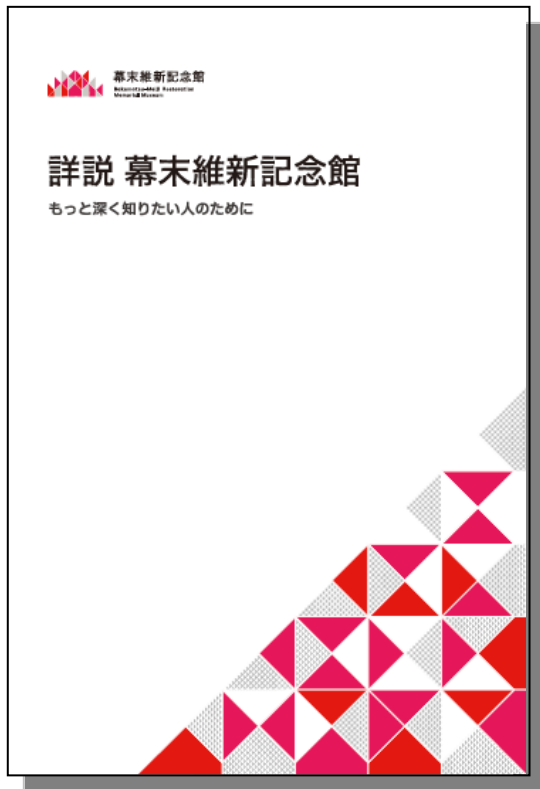


<表紙>



<裏面 (一部抜粋)>

第一場

「幕末維新」体感シアター

佐賀藩が握った明治維新の行方

2018年から1868年へタイムトリップ、150年の時空を超えて、いざ幕末維新期の佐賀へ。幕末維新期の知られざる物語を、迫力の映像とサウンドで体験することができるシアター。

江戸時代、戦国より平和の中にあつた日本。激動の時代の幕開けは、ペリー率いる米艦艦隊・黒船の来航でした。日本中が混乱するなか、世評を冷静に見ていた第十代佐賀藩主・編鳥居正経がいました。正経は意欲する国内外の情勢を遠征先「国内で争っている時ではない」と動きません。

しかし立ち上がると、近代化の先駆けとなった佐賀藩の権威と技術により、時代は明治の新しい世へと大きく動くことに……。そんな幕末維新期の物語を、迫力満々の映像で体験いただけます。

1-1 失敗を近代化の推進力に変えた佐賀藩
幕府は禁教令・ポルトガル館閉鎖禁止の後、1641年(寛永18年)にオランダ商館を島田に準し、入港権を長崎のみに制限。日本で唯一西洋に開かれた長崎の貿易を前藩藩主とも兼任した佐賀藩は、当藩年には1300人余り、非藩年にも500人余りが動員された。1808年(文化5年)オランダ船を襲ったイギリス軍艦が長崎港に侵入し、オランダ商館員を人質に食料と薪水に増え向船の明け渡しを要求するフェートン号事件が発生。佐賀藩はその責任を取り、幕府役人2名が切腹し9代藩主直正は百日誓の通達(ひゃそく)に、しかしこの長崎での失敗が、佐賀藩における西洋近代化を推進するエネルギーとなった。

1-2 世界を見ていた直正公
幕末の幕末期、直正ははっきりしない直正、孝明天皇の「異邦方面は我が藩の恩恵の恩恵に任ずべし」との言葉を受けた直正は、「吾は国力をこの方面に専らにし、敵えて大藩同士の功名争いには関与しない」と覚悟した。直正のその強い信念は、国内の幕末期に「この世の勢いは、政治の大きな変革に伴うもので免れることができないことだが、たゞいづれも國家に忘るる者に出でたること」「この際を察して我を奮げようとする外藩の野心には決して油断してはならない」という言葉に表れている。

1-3 朝廷の「去就を決せられよ」との命に對する佐賀藩の動向
1868年(慶応4年)に徳川慶喜討伐令が出され、京都に幕大なるが拒絶された。その際に忠告員は藩に對し「明日までに去就を決せられよ」と要求するも、佐賀藩は藩を代表する直正が京都におらず参加しなかった。その態度に對し、在京の藩領において「佐賀討伐すべし」との意見が提出することになった。その頃上京していた江藤新平は木戸孝允と後藤象二郎を介して、直正に「佐賀藩が上京できないのは長崎警備という重大な任務があるからで、幕王の精神において、決して後援に預れるものではない」と、説明を解くために奔走した。

1-4 上野戦争で使用されたアームストロング砲
直正は「内乱を鎮定する際には、ただ佐賀藩の最新式の小銃を用いるのみにて戦いは決することができ、たくさんの特典を殺してしまおうような強力な大砲の使用は避けるよう」と命令していた。しかし上野戦争の際、江藤新平は強主である幕府に對し「江戸全市の平和保衛のため幕府を援助することに決したが、西洋諸國に最も接近していた幕府が強力な武器を所有しているかもしれず、やむを得ない場合にはアームストロング砲の使用を認めてほしい」と直正。その使用が認められ、戦いの早結了を実現させることとなった。

1-5 民政の安定に努めた佐賀藩
戊辰戦争を通じて幕府、長州、土佐らは主として武力鎮定の最終目標に立って軍事的海軍を有していったのに対し、肥前にはさらにその背後にあって戦術的にも一般に對つた特別な働きもあつた。下野地方は、佐賀藩のもとで新政府への支配を一歩一歩進めていったとされている。直大が下野での戦いで土佐・薩摩から引き離された後、藩としてではなく勤王を擁護することに努め、農民は農作業に専事することができるようになった。

シアターへのアクセス

幕末維新記念館 佐賀市 1-1-1 佐賀市 1-1-1